
マジックアバウト！

城崎海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マジックアバウト！

【Nコード】

N8072C

【作者名】

城崎海

【あらすじ】

魔法学校に通う高校1年生零人、頑張っています。が色々大変らしいです。義姉やお嬢様や先生などヒロイン多めのラブコメディー

第一話 幼なじみと変わらぬ朝（前書き）

初投稿です、駄文ですがよろしく願います

第一話 幼なじみと変わらぬ朝

皆さんは魔法をどう思われているだろうか。

「あつたらべんりー」
だとか

「魔法で布団をひきたい」だとか

「落ちた物を拾うのに楽」などなど

考えていないだろうか

否

そんな考えしてるやつ

フザケンナー

あつ、すまん

つつい素が出てしまった

今、俺が言いたいことをわかる人はいないだろう

まあ、要は魔法を使ったりするには
それ相応のスタミナや精神力が必要って事

わかった？

オールオーケー？

あつ、ちょいすまん

そろそろ、俺の本体が起きる。

えっ、意味わかんない！

そりゃ、そうだ

これ実は夢だもん！

じゃね！

「ヴーン」

なんか、知らんが朝っぱらから、ストレス発散したような、すがすがしい気分だな

バイ

いやー太陽が眩しいや

ははは…

今のなしね！

OK、オールグリーン

時間、

まだ6時か！

さーて、ベットへゴ『ピンポーン』

チッ

もう、来やがったか

「起きろー」

ドタ、ドタ、ドタ
ガチャッ

バン

「えっ」

「朝、一番にそれかい」

「大丈夫か、頭打ったな、病院行くぞ」

いきなり、部屋に入ってきた奴はマジで俺を病院へ連れて行くこと
する

こんにゃろめ

「グボシッッ！」

腹にコブシを決める

よしっ、きた

「何する

「君は何失礼なこと言っているのかな？」

「だってよ、今まで一度だって俺が来ないと起きなかった零人がだ
よ、自分で起きてるってさ、夏に雪が降るようなもんだワワワ、ワ
ワ」

奴は驚愕の表情だ

やー

たしかにね、たしかに、
あまり自分で起きないよ
それは認めるでも

そこまでか、そんなにか

はぁーっ

朝からブルーにさせんなよ

自己紹介、まだだったな

俺は橘 タチバナ 零人 レイト

よろ

ああ

容姿はキモイと思うぜ

丸メガネ（度は入ってないが）なんとなく、つけてるし

髪は灰色これにも理由があるが、それはのちのち

「ワワ・・・」

まだ、混乱している

コイツは

モリノ 森野 コンチ 根治

腹だたしいが容姿がいい
女子にもモテるんだ

髪は茶色、以下同文

「おい、リビングいくぞ」

俺はこの時気付いてなかった変わり始めている日常に・・・

第一話 幼なじみと変わらぬ朝（後書き）

どうでしたでしょうか？申し訳ありませんが、不定期連載です。

次回からはゲストなどをよびます。

これから宜しくお願いします。

第二話 姉とあまり変化がない朝

リビングに行った俺はギョツとしたね

いやー、焦った

どのくらいかと言うと、死んだお爺ちゃんに改めて再会した時くらい。

すいません、嘘です。

そんなに驚いてないです

いやー、たしかに若干ビビったけどさ

どのくらいかと言うとゾンビがいきなり、現れた時くらい。

いや、そっちの方がヤバイよ確実に！

朝だからか・・・

ヨシッ

状況説明するかな

ただ単に我が家に我が姉が不法侵入してただけなんだけどね。

「オハヨー、零くん」

「ああ、おはようってゆうか何故？」

朝から弟の家に不法侵入するほど大事な用事なんてある？

「零くんに私の手料理を食べて欲しかったし・・・」

キッチンには料理を作った、形跡はあるし

テーブルには美味しそうな匂いのするやつがあるけどって気にする
とこ違ーう

あなたさー、恋人に言っただけなら、かなり嬉しい事弟に言っかい。

ちなみに、この人は私の *sister* で、名前は橘 タチバナ 美玖 ミク

ちなみに俺とかの通っている学校の生徒会会長で容姿端麗、文武両
道とかなり、凄い存在で学校でもファンクラブがあるほど

この人は知らないが

実は俺と美玖ネエは義姉弟なのです

でも、こんな感じじゃなかった

違う、なんと言っか俺の事は弟として扱ってたし・・・
これじゃ、恋人だ

うーん

「どうした零人？」

いつの間にか混乱状態から回復し隣にいた根治が言う

今、俺にしては珍しく深いこと考えていたのに

まあ、せっかくの行為だし素直に頂くか

いつの間にか、挨拶を交わし

テーブルに座って料理を食べようとしている根治が美玖ネエに叱られてる

早速、頂くとするか

「いただきまーす」

ターゲット確認キャッチ

卵焼き

口に一直線

「どう、零くん？」

なんだその期待と不安のこもった視線は

「うん、すげーうまいよ」

素直な意見をのべた、そりゃあ、全校生徒憧れの的の料理が不味いわけないから

「やった！」

それを言っただけで、キャピキャピ騒ぐ美玖ネエ

あつ、可愛い

ちくしょー、不覚にもそんな事を思ってしまった。
早く食ってやろう

それでも、俺が一口食べることに

「おいしい」なんて毎度のごとく聞いてきて疲れた

ああー、食事するだけでこんなに疲れるか

変化が訪れる朝

入学式に向かう

第二話 姉とあまり変化がない朝（後書き）

どうも城崎です。

今回はゲストをお呼びしました

橘 零人さんです。

零人以下レク駄文だな

いきなりそれ！他無いの

レ<今日はどうも有難うございました。

それシメもう終わりですか、エーエー

第三話 姉と謎の人と陰謀

時は変わって

通学路

痛い、痛い、痛い

何って？

視線が

何で視線が痛いかって？

横で俺の腕を抱いている人がいるからですよ。

まあ、だいたい予想つきますよね。

愚姉です。

ほんの5分前は憧れのような姉でした。

ですが、今はバカ！

5分前

場所 家出てちよつとの道

まあ、玄関あたりまでは何ともなかったんだけどね。

人が多くなってきたら、いきなり音にすると『ガバッ』って感じで腕にしがみついてきたんだよね。

で結構焦ったんだけどね

だっていきなりだよ
そりゃ、焦るわー

「ちょっ、おま、なにっ」

「エヘー」

「やめっ、離せバカッ！」

憧れすら抱いていた姉にバカと言ったこと無かったよ、俺は・・・

「イヤッ！」

えっ、一言っていうか即答？

このままじゃ、学校付近に行ってファンクラブの奴らに見られて、
コロンビア、ちがうっつ、頭がこんがらがるかもしれない、殺さ
れてもヤなのですぐ引き離しにかかる

「あっ！！」

意外とすぐ外れた

姉は力が強い

だから、もうちょっとなんか粘るかと思った。

うっ、今笑った

くちもただけ不適に

命名、黒い笑顔

我ながらユーモアセンスの無いネーミングだ

そんな、くだらない事を考えている時、事件が起きた

あろうことか、その姉は泣き出したのだ

「うつ、うつ、ぐす、エーン」

「なっっ！！！！！！！」

噓泣きだと

そしてこの場所が効果を発揮する
ここは人通りが多い道だ。

まあ、察して貰えると思うがヒソヒソ言われる

「彼女、可哀想」

「彼氏も腕ぐらい、いいのにね」

違います、この女は姉で決して恋人じゃありません。
ホントです、信じて

「うつうつ、ヒッグ、ヒッ」

「泣くな、おいっ」

「ウー、ウー」

「わかった、わかったから！」

「ウグッ、ホント？」

「うんうん、ホントホント」

で、現在

その後、愚姉から満点の笑みをもらい

俺はギコちない笑みになった

「もういいだろ、美玖ネエ」

「イヤ」

これで計10回目

俺は言い方を変えているが
美玖ネエは

「イヤ」の一点張り

「ハア・・・」

俺、今日で寿命10年縮んだな、絶対・・・

「何？悩み事、お姉様が聞いてしんぜよう」

アンタだよ、ちゅうか気づけよ

「イヤ、何でもない」

声に出せない俺、弱いな

そんなこんなで学校に着いたが・・・俺としては、あの360度全方位で殺気がバシバシ当たっていたことをそんなこんなで済ませるのは何とも腹立たしい。

キッ、と上を見上げる俺

何となく睨みたくなった

誰かが空から謝っている感じがして若干イライラが収まった
やったね

今、校門前なんだが何か忘れてる気がする
メガネは・・・あつ、忘れた
なーんだそんなことが

「レ・イ・トくん!!!」

何かね、私の幼なじみもとい根治くん？

あれ、言ってなかった？

ごめん、最近物忘れ激しいんだよねテヘ♪

えっ、キモい

しょうがないじゃん、この状況じゃさ

「フフフ・・・」

冷や汗だらだらだ

行くとき美玖ネエに急かされたし、あんな事あったし、しょうがな
くないかなー

？視点

ここが今日から私の
「覚悟してね」零ちゃん」

美玖視点

苦節100年
やっと零くんと・・・
キャッ！！

落としてみせる

橘 零人

状況が変わったから
フフ

でも、あの人も帰ってくるのよね。
まあ、いいわ
クッククックク

零人視点

ブルッ

背中に悪寒が走った
根治か！

零人、根治から逃走中！！

第三話 姉と謎の人と陰謀（後書き）

どうも。わたくしごとですがテスト近いです。なので少し自分なりに長くしてみました、でもこれ待ってくれている人いるのかな？ネガティブになるのでこちら辺でお暇します。

第四話 魔法とクラスと抱きつき魔！？

私立清涼魔法学校と魔法について話そう

私立清涼魔法学校（以下清涼）とは小・中・高・大とエスカレーター式であがっていける学校で、今年で出来てから10年目の歴史が浅い学校である。

まあ、清涼については後で話すとして、今は魔法の話しよう魔法とは、手から炎を出したり空を飛んだりする、皆さんが想像しているのと同じである。

ただ単に最初にも言っ たと思うが

スタミナや能力を必要としたり

基礎能力や知識を育てるために学校に行ったりする必要がある。

とまあ、後は随時説明していくが大変なのである。

学校についてだが、やはり魔法学校と普通の学校では違いがでる。

違いその1

クラス分けは自分の力量にあったクラスに分けられること。

クラスはS～Iまでで強い人ほどいい授業を与えられる。

弱い人は魔法を多くだす為にマラソンなどをしてスタミナを鍛えるのである。

違いその2

染髪が許されていること。

許されていると言うのは間違いで、ただ魔法が使える人間は遺伝子に何らかのエネルギーが入り込み、遺伝子が髪だけになぜか異常をきたす。

なぜ髪だけなのかは、解明できていないらしい

違いその3

学校がとにかく広いこと。

これは、生徒達の戦いや授業の時試したりするときに使う場所が幅をとっているからだこころで説明を終えたいと思う。by 作者

どうも、零人です。

奴には魔法が禁止されているので鉄拳制裁が下されました。

起こしに来てくれたのに、置いてけぼりにしたのでしょうがないと思う。

すまん

俺達は今、クラス分けを見に向かってる

「いやー、楽しみだな」

「何が？」

「へっ？クラス分け・・・」

こいつは、呆けた顔をして言う

「もう分かってんだろ、お前はSだ」

コイツは顔もいいが成績もいい

神様、いるなら俺はあんたを恨むよ

「そんな事知ってるよ、おまえんだよ」
当たり前だと言う感じの言い方だ

「俺はIだよ」

「と、いうことはお前真面目にやんなかったのか・・・ハア・・・」
溜め息つてさー

正直、俺は魔法に関してはとても才能がある。

だが、あまりやる気がない、何故かと言われると、別に将来は魔法で食っていきこうとは思わないのだ。

それに俺は平凡が好きなのだ。

Sクラスに行って平凡を崩されたくない

「いいだろ、別に」

コイツにこんな感じな事を言われた時は曖昧に返事を返す。
最後の理由なんて言っと、コイツは俺を殴るだろう

「真面目にやってくれよ、俺は普通が嫌いなんだ」

知るかつつ！！俺を巻き込ませてくれ

話しているうちに掲示板前に到着

「着いたつと」

意外と人いないな・・・

「S - 1 だな」

やっぱSか

コイツのはどうでもいい俺の俺の

「あれっ、ないぞ」

I はない

「おいつつ、零人のS - 1にあるぞつつ」

テンションあがんなウザイ

それはいい

あのボケ理事長もう90なんだから定年退職しろ！！
後で異議申し立てせねば、つたく

「今・・・何時だ？」

「あん、えーつと・・・マズツツ」

チャイム一分前！！！！！！

だとしたら人がいないのも頷ける。

考えてる場合じゃない!!!!!!

はーはー、間に合った
『ガラガラ』

フー

教室に入ると一人の女の子と目があつた。

刹那

女の子に抱きつかれた

ナツ、ナンナンドコリヤ
「フツ」

おい、根治助ける
「がんば」

がんばじゃねー
- - - - -

女の子と触れ合いが多い今日ごろ
冷静な零人より

第四話 魔法とクラスと抱きつき魔！？（後書き）

更新遅れました。 すいません 弁解もありません ゲストも呼び
ません 城崎でした。 くらつつつつ

第五話 昔とよっちゃん（前書き）

更新遅れました…

第五話 昔とよっちゃん

「ねえ、何で誰とも付き合わないの？いっぱい告白されてるのに」

「好きな人がいるんだ！！！！」

「ええ〜誰誰誰！？」

「教えない」

「ブーン絶対聞き出してやるんだから」

なんと言われても教える気はない
あの人を好きになったこと

昔、私が中学一年生の頃、ある事件があった。

ミスターX事件

ミスターXという人物が魔法で
街に妖魔…俗に言う妖怪があふれさせた

あのときの私はそこそ成績もよかった
私は自分の事を過大評価していた・・・

弱い妖魔なら倒せると、今考えるとありえない話だそんな簡単に倒せる相手じゃない。

「まずい・・・」

壁に追い詰められてしまった

妖魔の腕が上げられる。

ゴメンナサイ、お母さん　ゴメンナサイ、お父さん

「聖なる水よ敵を倒せ・・・」

「グワァー」

妖魔は断末魔あげその場から消え去った

生きてた…全身の力が抜けたようにその場にしゃがみこむ

「おい、大丈夫か？」

「はい、大丈夫です！」

私は慌てて震える声を絞り出す。

正直驚いた私を助けてくれた人は大人ではなく、ましてや高校生でもなかった

その場にいた人は私と同じくらいの人であろう少年なのだから

「そっか、良かった・・・」

その人は本当に安堵したようにほっと息をついたのは一瞬で次は怒りの形相に変わった

「こんなところで何してる、妖魔を倒しに来たとは言わないよな」

そのとうりだ嘘もつけなかった

「今すぐ帰れ、今すぐだ!!!!!!」

「あなたは？」

「俺はまだ仕事がある、まだ帰らん」

落ち着いたのか少し柔らかい顔になった

「わかりました、ありがとうございます」
一つ聞き忘れてた

「名前教えてもらえないかな？」

「俺は橘零人、忘れてくれてかまへんよ」

そうして私は家に帰った彼に恋をして

零人視点

おおおおおお、落ち着け・・・・・・・・よし

「ナツナニカカナナ七？」

全然落ち着いてないし

ちゅうか無理だぜ、予想だにしないし

「ごっ、ごめんなさい・・・感動しちゃって・・・」
何がですか???

相当恥ずかしいのか顔を赤くしてすぐに俺から離れる

おっ、今見てみるとかなりかわいい子だな茶色で肩まである髪にさらにスタイルもいい
フムフム

って、今気づいたがかなり痛い視線が、さっきの混乱で何が何だか・・・朝からきついで・・・

「あのー」

何かさっきから言っていたらしい

「なに??」

「あなた、橘零人君だよね!？」
超能力者!!!!!!!!!!

「ちっ違っよ!!!!!!!!!!」

どうやら口に出しちゃったらしい

「じゃあ...うーんと霊能力者？」

「無理やり搾り出さなくていいよ」

なにーい、ここは重要どころだろそれに俺はツッコミ係だ

「それは、新たな侮辱か！」

「えっ??」

「おい、お前ら先生の前でどうどうと会話とはそつちに侮辱か！」

後ろに先生が立っていたらしい…みんなは（俺たち二人を除いて）座っていた、誰か教えようぜ
振り向いた先には

「吉田先生もといヨツチャン!!!」

よしだ たくみ
吉田 拓海

我が清涼魔法学校の先生だ

この先生は（今日は忘れたが）眼鏡同士仲良くさせてもらっている
いやゝ、この人はいいい先生だよ

主にラーメン奢ってくれたりすることか、ラーメン奢ってくれたり
することか、ラーメン奢ってくれたりすることか
ツッコミはなしで

「きずいてもらえるか試していたら全然きずかなくて始業式の間
が来てしまった。ハハハ」

「お前らの処分は後だ早く行け!!!」

無理やり追い出される感じで廊下に出された。
やるか高校生活一日目

俺はまたここでまた驚くことがあるのだがそれはまた次に…

第五話 昔とよっちゃん（後書き）

零 で、何か言うことは

作 ありません！！！！

零 威張んな、貴様はオンラインゲームにはまり更新しなかった

作 はい、久しぶりに見てみたらなんとこのへっばこ小説にコメントが来ていて嬉しくなって頑張りました

美玖（以下美）今日はほぼ二人の話だったじゃない、私出しなさい
作 まだ新キャラ全部出ていないですし我慢してください…ぎゃー
首しめないでー

零 作者が落ちた所でお別れです（ゲスト出しますと言って
ださなかった罰だ）

零と美

さよーならー

第六話 入学式と母親と少しの修羅場！？

そして始業式

「魔法はかくしかじか…」

教頭かくしかじかじゃわかんよ
えっ、言っちゃ駄目！

いやゝ教頭話し長いよ
前のはなんだって
何のことかなー？

駄目だ教頭、俺寝ちまう助けてヘルプミ-

「やはり、魔法とゆうものは…」

ギャー、煽るなー

だ、駄目だ…やめる話…クー、クー

『オーーーーー』 『キャーーーー』

う、う、うるせー

わー、わー、わー、わー、きゃー、きゃー、かー、かー

最後のは関係ないけどな
腹いせに隣の根治を殴る
『ガシッ』

「イツ、ナツ、ナニ」別に「ざけんな」

「所で何の騒ぎ？」

「前見てみるよ」

「ナツッ、なぜアノ人が」

「なんでも、次の校長だつてさ」

「えーーーーー」

そんな、バカなアノ人は今アメリカにいるはずなのに…

俺の平穩がガラガラと音をたてて崩れていくような気がする

「ぐすん、ぐす、ぐす」

「泣、泣くなよ…コレぐらいで…」

「うるせー、お前に、お前なんか俺の気持ちかわかるかー！！！」
走り出したい気持ちを抑えつつ小声で会話する俺たち、だって始業式だよ！

ちゅうか、誰だつて！

ああ、言つてなかった！？

私の母親でさー

なんで、母親なのに嫌なのかってことねそれは「どうも、新任理事長の橘玲香です」

被ったな、狙ったのか！？ちゅうか今まで何してたの

「これから、よろしくお願いします…特に言うことはありませんが

…」

それだけ？他に問題発言なんかすんなよ…頼むから…

「零ちゃんにあまり手、出さないでくださいね…」

黒いオーラでてんぞ………つてなに、言い出すんだー！
回りはザワザワしてんぞ

『零ちゃんって誰だ？』『先生とか…？』

「娘も居ますがライバルになるっぽいのでご自由に美玖ちゃんは自己責任で」

娘はどうでもいいんかい

やばいツツコミ属性が発動してしまった………どうでもいいね

「とまあ、ここまでで私の話を終えます」

短つつつ、少しは教頭見習え！！！！！！

………あつ、そういえば母親の紹介まだじゃね…

えーと

たちはな

橘 玲香

髪は青色のロング

年は……んー、よくわからんのよ、いやだいぶ前に聞いたんだ
けどね…なんかはぐらかされちゃったんだよ

この人に言葉使ってうまく誘導された（俺がだまされやすいんじゃないよ！！）

それに母は、本当に子供がいるの！？と疑うほど若い、とにかく若

い、まあ簡単に言うところだ

うちの高校の制服を着せたら全然通るだろうらいたと思ってくれ。わかりづらいな………まっいつか

それと母は結構有名な魔術師で、わーきゃー言われることが多い、ってかさつきも言われてたな

後一つこれが完璧な母唯一の汚点でいまだに子離れができていない

ま、こんなもんでええか（なぜか関西弁）

「おい、早く出るぞな」にぼうっとしてんだ」

とよっちゃん、いつの間にか終わっていたらしい

だから誰か教えるよ…根治…友達がいの無いやつ、ふん、いいもんねいいもんね

あれっ、誰か出口の前で立ってる

ああさつき子が…

なんか、文句でもあるのだろうか

「何！！！」

若干、威圧的に

「えーっと、待ってた？」

聞かれても困るけど

えっ、待っててくれたの

「てんし様や」

あの皆が皆見捨てるなか、よくぞわたくしめを待っててくれた

「へっつ！?!?!？」

口に出しちゃった

この癖直さねばいかな

「じゃあ、行こうぜ。よっちゃんに睨まれてる」
話をずらした、それにあれば早く行けと目で語っている見てないけど

「うん」

なにが嬉しいんだ、その無垢な笑みをこちらに向けんでくれ

「あーーーーー」

誰！？

振り向いた瞬間相手も確認できず抱きしめられた
男だったらやだぞ俺は

「零くん、この子誰…？」

そんな心配無用だったらしいってか離れる！！！！！！
あんたは弟としてしかみてないだろうが、こっちは義理だって知ってんだぞ

「ああこの子は・・・」

姉を剥がしながらも律儀に答える俺、えらい
あれ、誰だ？？？

「誰だっけ？」

「知らないの？」

いや、しょうがないじゃん

さっきよっちゃんに即追い出されたし

「自己紹介してなかったね、わたしは神田かんだ 来実くるみよろしく、あと零

人くんさ生徒会長とどんな関係？」

えっ、怖いよ、やめてよその目

「もちろん恋人同士」

おいっ、このタイミングで爆弾発言すんな
なぜかさらに怒ってるし

「違う違う、姉姉」

「そうだよ、そういえば生徒会長も橘だ!!」
ほっとしたように言う、ホワァイ

「おい、お前ら行け!!!!」
よっちゃんだ

「わかりました、行くぞ!!じゃあ美玖ネエ」
手をとってその場から俊足で去る

美玖視点

「むう」

零くんはあの来実って言う子の手をとって逃げるようにでいく

「邪魔しないで……」

「ええ、ええーつと、すすす、すまん」
吉田は冷や汗をかいている

「まあまあ、美玖ちゃん」
お母さんだ、吉田はまあいい

「さっきのやつは何」
自己紹介のことだ

零くんをなんとかかんとかってやつだ

「まあ、いいでしょコレで少しでも零ちゃんに近づくメス犬が減れば」
ひどい言い方だがやりかたはまあまあだ

「ふっふっふっふ」

「ふっふっふっふ」

零（くん）（ちゃん）は私のもの

零人視点

ブルッ

もう季節は冬か（思いつきり春です）

またもきずかず
ビバ、鈍感

第六話 入学式と母親と少しの修羅場！？（後書き）

零 今回も遅いな

作 でも前よりは早くに

美 調子に乗ってんの？

作 すいませんでした（作者は若干の美玖恐怖症に）

あたしの出番まだ〜

作 やめろ、ネタばれだ

じゃあ、早く出してよ

作 ちょいやめろ……ぐだぐだなのでこのへんでさようちよちよ
やめやめ

また見てくださいね、さようならー

第七話 殺気と鈍感とおっとり先生（前書き）

一万ヘイトありがとうございます

第七話 殺気と鈍感とおっとり先生

教室にいる俺

そして、歓声？とともに殺気

なんの歓声だ？もしくは発狂か？

そうか、そんなに不細工と美人が手をつないで教室に入って来たらあかんか、女子達よ

いやー男子たち私を睨まないでくれ、悪いのは私ではない…美玖ネエモとい会長だ

そういえばアノ会話であいつ怒ってたな、差し詰め何もきずかなかったが多分地味に攻撃でもしていたんだろ…姑息な手段だ、また一人自分の支配下に置く気か？

「気をつけるよ…」

「へっ？」

またまた理解できないようだ

駄目な子ね、まったく読心術くらい身につけなさい……………やっぱやめて俺が頭ん中でこんなこと考えてるなんて知って欲しくない

席が黒板に貼ってあるな

うーんと・・・橘 零人 神田 来実

「なんか縁があるなこれからよろしく、神田」
挨拶は基本だよね！！！！

「えっ！うつうんよろしく」

顔赤くするほど俺の笑顔キモイか？いやーしょうがないけどさ、せめてポーカ―フェイスをもって頂きたいな俺は

「ええっと、あ、あのさ名前で呼んで欲しいかなー、なんてテへ」
おい、俺が最初らへんでやってしまったミスを繰り返してるよこの人…でも違うのはかわいいって所だな

「何で？」

「ええっとそのなんていうかええっ……」

「OK、了解ですお嬢様じゃなくて来実早く座んない？」

「うん、そうだね」

笑みを振りまくな、ああーい毒じゃぞその笑顔は毒じゃぞ

「なゝにイチヤイチヤしてんの君らは？」

席に座った瞬間根治が言う

「しとらんわ、黙れバカ」

俺はいいがあまり来実に迷惑掛けんな、それに俺に男子たちの殺気が一層強まっただろうが（やつぱり自分も大事）

「ちよっ、ちよつとや、やめてよ」

ほら、言わんこつちやない（正確には言っていないが）

「ゴメンゴメン、俺は森野根治、よろしゅうしてや」

「こちらこそ、よろしく」

美男美女か絵になるねーやっぱ

「あれ、紹介なし俺じゃ駄目!？」

「いやっちうちがうよちがうちがうわ私は神田来実だよ、あ改めでよろろしく」

おい、慌てすぎだろ

「落ち着け」

冷静になれよ

「うっうん、もう大丈夫だから」
大丈夫ならいいけど……

『ガヤガヤ、ガヤガヤ』

なんかさっきから（主に女子が）俺の顔を見て何か言ってる

「カッコいい」

何だ根治のことが

「根治人気だな」

ふてくされたように言ってみる

「もしかして零人くんって……」

「ああ、そうだ零人はかなり……」

「「鈍感」」

二人して呆れたように言う

俺のどこが？

俺自身人よりいくらか敏感だと思っぞ

なにこの、かわいそうな人って言うような視線は
話題を変えよう

「そういえば、俺の名前知ってたけどいつか会った？」

「話題変えるの下手だな」
黙れ！！！！

「うん、憶えてないかもしれないけど、零人くんは命の恩人なんだ」

「悪い、憶えてない何時の話？」

「無理ないね、あの時は仕事忙しそうだったし…ミスターX事件の
時・・・」

来美の話を聞いた

ああ、あの時か確かそんなこともあったな・・・

「それで俺の名前を知ってたわけだ、忘れてくれても構わなかった
のに…」

「そりゃ、命の恩人を忘れる方が無理だろ」
まあ、言われてみれば

『がらがら』

教室のドアが開く
そこにはよっちゃんとかわいらしい女の子

「「「かわつっいい」」」
と男子たち

それって言いづらくないの

「うるさいぞ、馬鹿共」

よっちゃん・・・仮にも教え子に馬鹿は無いだろ
生徒はシーーンとなったけど

「ちなみに言っておくがこの人は転校生じゃないぞ」
えっ、違うの

「この人は、新任の先生だ！！わかったか！！！！かわいい発言禁止
！！！！それじゃ川合先生お願いします」

「はっはい」
緊張してるな

ちよこちよこ歩き黒板の前に立つ先生
ぜんッぜん先生には見えんなこの人

「川合^{かわい} 煉^{れん}です。皆さんに迷惑を掛けるかもしれませんがよろしく
お願いします。」

ぺこりと一礼しキョロキョロと教室を見回す、しかも涙目

「聞きたいこともあるだろうから質問タイムを設ける、ただし質問
することを間違えるなよ！」

「何歳ですか？」

「何型ですか？」

「担当教科は？」

「誕生日は？」

「元気ですか？」

「魔法はどんなやつが使えるんですか？」

「甘いものは好きですか？」

「好きな男性のタイプは？」

「スリーサイズは？」

「はい、年は22で」

「A型です」

「担当教科は普通教科の国語です」

「誕生日は1月29日です」

「元気です」

「ええっと、補助魔法全般などを」

「甘いものは好きです」

聖徳太子ですか・・・すげえよ若干尊敬しちまう

「好きな男性のタイプは「先生」！」「すいません」

「スリーサイズは上から「先生」！！」「ごめんなさい」

いや、限度考えろよ！！俺でも少し気にするんだからよっちゃんは
なおさらだろう

「最後質問した二人来い！！！」

よっちゃんと川合先生と怖いもの知らず二人は出て行く
ありゃ、よっちゃんの雷が落ちるな

ご愁傷様・・・チーン

「根治どう思う？」

「面白くなりやいいよ俺は」

お前はそういう奴だよな
聞いた俺がばかだったわ…

「来実は？」

「いや、私は特に…」

二人はそう言うものの不安を感じずにはいられない零人であった…

第七話 殺気と鈍感とおっとり先生（後書き）

ゲスト呼ぶのやめようかなと考えている城崎です。

もしも「やっぱ呼んだほうがいいんじゃないね」と思う人は
ずうずうしい頼みですがコメントお願いします。

人物紹介についてのことですが今適当な感じなのは

実は後から節目あたりに紹介しようと思うんで、気長に待って頂けるとありがたいです

それと申し訳ありませんでした。

第八話 苦勞と名無しと副会長

そのまま、休み時間が来た

はあ…めんどいな、何が？ってか
今まですつと保留してたけどさ

俺、sって可笑しいじゃん、字間違えてるような気がするけど
アノ爺さんだったらボケたんだと思ったがアノ人だと絶対わざとだしな…

「どうしたんだ？」
根治が聞く

「いやあさ…俺クラス間違えてるだろ、だから変えてもらいに」

「ふんがんばれよ」
えっ、意外だ

こうゆうのを拍子抜けってゆうんだな
根治のことだから、俺止められると思った
と言ったら

「お前、どうせ聞かないだろ」
確かに！！！！さすが幼馴染だ

「じゃあ、行くわ」

「それに俺は玲香さんを信じてるし…」

根治がなんか小声でしゃべってる

「なに？」

「なんでもない、早く行けば」
「ゆわれんでもわかってるわ」

さつきから、注目を浴びているし時間も無いため少し早足で外に出る

根治視点

「零人くんクラス変わるの??」

不安そうな目で俺を見る来実さん
「やっぱり好きなのね……」
「ばれやすいよ……」

「心配いらないと思うよ」

「なんで??」

「今の校長最強だし」

「そんなの関係ないじゃない!!!!」
怒り始めた

「まったく何で俺がこんなこと処理しなきゃならんだ、まったく」

「アノ人のことだきつと秘密兵器を持つてるだろうさ、それに零人の扱いにもなれてんだろ」

「ごめん…」

「気にするな、きっと…いや絶対戻ってくるから」

零人視点

「ヘックシツッ」

冒頭からこれとは情けないな…

ここのオーラのせいかな

校長室

『ドーン』と音が聞こえそうなほど堂々としているように見えるから不思議だ

「コンコン、失礼します」

ちなみにコンコンは俺の声だよ

『ガチャ』

校長室に一步入る

「って何してん『ボタン、ガチャ』オイッ」

例の人がドアの前に立っていて即行ドアさらに鍵まで閉める

「零ちゃ〜〜ん」

抱きついてくるそして避ける俺

「うおつと!!」

なぜ、抱き付かれてる俺!? 避けたよね!?

誰が見た??? 見てないよな、ここ二人しかないし

今、俺は一人ボケツッコミの悲しさを知った

「うーん、零ちゃんの匂いだー」

クンクン匂いをかいでいる母

一体アンタは何歳なんだ?

「オイッ、今ワンパターン化してるからヤメロ」

俺の理性もと心の中で追加

「イヤ!」

またー、やっぱり親子やね

「無理言つな...」

「久しぶりなのに…うん、じゃあキスしてくれたらいい」無理！
「…」な〜んで〜！」

「アンタ接し方間違えてるよ…」

俺は苦勞するという厄日であろうと今頃悟った俺

そうだ、温泉に行こう！

いいね、露天にサウナ、ジャグジー

コレは冷静になるという名の現実逃避

だってさーしょうがないよ、やっぱりかわいい！！！！自分の母だけ
ど…それにさっきからね！わかるでしょ！当たってるんですよ！柔
らかいの！！！！

言っとくが努力はしてるよ

さっきから何度も何度も剥がそうとするけど、一筋縄じゃいかんわ
けですよ

『ボタン』

いきなり、ドアが開く

やった！救世主登場

「美玖ネエ〜！！」

『助けて』と涙目でアピール

「なーにしてんのかーなー」

こわっ、まずいよ

その笑顔！

「ふふふふ…」

オイ、手から電流が

やめてくれ、しつかりとした魔法初登場がこんな形なんていやだよ

「美玖ネエ、な、とりあえず落ち着こうよな、な」

なんで美玖ネエが怒ってんのかわからんし

あつ、そうかそりゃ息子と母がくっついてたらキモいよね

「零くんの頼みなら……とりあえず離れなさい」

しぶしぶといった感じで離れる母

なにを考えているんですか、まったくお母さんは許しませんよ

母の母になる俺

意味わかんないよね……

軽くブルーだ………

「で、美玖ちゃんは何しに？」

俺の気持ちなど露知らず、いきなり話し始める母

あつ、今気づいたけど、まだ俺本題に入っていないよ

「あのさ「始業式の事とか今後の学校生活とか色々のプリントとか」泣いていい？」

まさか、あの美玖ネエに被せられるとは

いいよ、いいよ

「零くん、何してんの？」

美玖ネエがドアの近くでのの字を書きながらいじけている俺に気づいたらしい

どうやら話しは終わったようだ

「とりあえず、私は戻るから零くんには何もしないでね！」

「わかったよ、でもね私もライバルだからね！」

「知ってる！」

二人で話進めんなチンプンカンプンじゃろうが

「何のこと????」

「きーにしない、きにしない」

母が即興音楽で俺を宥める

「じゃ、私は行くから！じゃあね！零くん！」

「う、うんじゃあ」

なんか流されたような・・・うん、まっいつか

『ボタン』と音をだし、校長室から消えていった

アレっ？そっぴやどうやってココに入って来たんだ

「で、零ちゃんは何？」

俺の思考をシャットダウンさせて言う、彼女

そうでした、なんで俺はこの短時間で二度も本題を忘れたんだよ

「いや、クラスの違いのためクラスを変えて頂きたく思いまして」

「零ちゃんは、川合先生じゃダメなの」

「いや、そういうことじゃなくて『ドカン』「そうなんですか？橘君？」か、川合先生！！」

今にも泣きそうな目で俺を見る先生

なんで、このタイミングで入って来るんですか、まさか美玖ネエまで計算に入れつつ、さらに先生の来る時間までも！！恐るべし橘玲香

わっ笑ってる、不気味に

「先生違います！」

「やっぱりそうですよね…新入りの私なんか…」
「聞いてちやいねー」

「先生話を聞いてください！！！」

「ひゃ、ひゃい」

いきなり、肩を掴んで言っただけだから驚かれた

「違います。ただ僕の「いいんです、もう学校を辞めますから」
うおおおい

「零ちゃんが我慢するかそれとも、やっと憧れの教師になれた川合先生に辞めさせるかどっちかな」

なんて小声で言う母

決定権無いだろ俺…

「・・・で、話は流れちゃったわけか・・・」
現教室で机に座った状態、今根治と来実に校長室での事を聞かせてる
いや、しょうがないじゃんもう泣いてたもん

「よかつた」

「ん？なんか言ったか？」

「うっん、何でも無い！！！」

その笑みは凶器だな、前にも似たような事いったな・・・

「ってさー、さっきから突っ込みたかったんだけど、アンタ誰？」

「へっ？いやいやいや、そこは気にせずに気にせずに」

根治の隣の椅子に何食わぬ顔で座っている奴に聞く

気になるよ！それに突っ込んでしまったからには後処理までするよ！

あゝ、でもこのままほっとくのもアリか・・・

「でさ」根治「ちょちょちょい、やっぱかまってよ」で誰だよ」

最初からそう言え
時間をもつたいないだろ

「私は『キーンコーンカーンコーン』『皆さん席についてください』
可哀想にタイミングが悪い

どうやら奴は席が違うらしく急いで戻っていった

俺がこのクラスに戻ってしまう原因を作った先生が話す。

「ええ」と、今日はお疲れ様でした（以下省略）今日は氣をつけて
帰ってください、ではさようなら！」

なんか間が抜けてるような氣がするが氣にしない、ええ氣にしない
とも

「帰るぞ、根治ー!!」

「悪いちよつと呼ばれてんだ」

「なにに？」

「たいした事じゃない、氣にするな」

ああ、わかったぞ！

俺のシックスセンスが告げている、こいつ彼女ができたな（今まで
の正解率5%）

ここで、冴えわたる男の勘

「じゃっ、わかった」

「なに、ニヤニヤしてんだ？」

「がんばれよ…じゃな」

根治は？をうつぐらい付けながらも「じゃあな」と返してくれた
さうで、さっさと帰るかな

作者視点

生徒会室

「入るぞ」

根治

「根治、準備は整ってるの？」
生徒会副会長

「ああ・・・」

「ありがとうね根治くん、まっ、これも零くんのためだと思って！」
生徒会会長

（自分のためだろ・・・）

（悪い、零人の事売るわ…）

心の中で謝罪を繰り返す根治、何があっても零人頑張れ！！！！！！

第八話 苦勞と名無しと副会長（後書き）

今、短編書こうかなと思っている城崎です。
どうですかね、悩んでいるんですが・・・
こっちもまともにできてないのに・・・

人物紹介についてですが、前も書いたんですが
ある程度キャラクターが出てからのつもりなので
待っていてください、お願いします。

今日はこのへば小説を読んで頂きありがとうございました。ではまたの機会に

第九話 バトルとツンデレと事情

ちっ、ウザイのに絡まれちまったな
なんなんだほんと厄日だな、今日は…

「オイッ、きいてんのか!」

「うぜえ（小声）」

さっきからよー

前からガヤガヤうるさい3年生と思われる男は・・・って名前は知らん、だつてさっきから右から左へ受け流してるもん。

この学校から出た瞬間いきなり来て、気に食わないとか
校門前でね

気に食わないだけじゃ判らんよね…

なんか朝、美玖ネエが俺にくつついているところを見られたらしい

まっ、それだけなんですけど

やっぱ美玖ネエ人気あんなー

イカツイ顔の男に睨まれながらも関係ないことを考えている俺は結構凶太いのかも

「ミヤロウ」

噛んだの？今噛んだの？

ニヤロウならまだわかるけど…ミヤロウって、この場面で…
ダメだ、堪えられない…

「ふふっ、ふふ……」

「てめえ、ふざけてんのか」

どうやら、笑ったのがバレたらしい

戦闘体勢に入る男

「ちよちよいちよい先輩暴力反対っす、だからー俺と会長は姉弟きょうだいですって」

スポーツマン風

聞く耳持たず

そつだよさっきからコレ言ってるのに無視するし

何で無視するかな、そこが重要どころだろ

前に拳を突き出す男

なんだ喧嘩慣れてないな…こんなの、掴んで捻れば…ヨシッ、
発つと

「イタタタタタ」

涙目かい、それにしてもアンタのいかつい顔じゃ効かんよ

俺はな、アノ先生の涙と一戦交えたんだぞ…そんな男ので効くか！！

もういいかな…

「うあつ」

掴んでいた手首を勢いよく話す

「先輩もうこんなことしないだ」もうフィールドの準備はできてる、明日授業が終わった後魔法でもう一度勝負だ」

オーイ、陳腐な遠吠えだけ言って、帰るな」

ってか、フィールドとか、よくそんな私事で使えんな

備考

フィールドとは通常では生徒同士の戦いは禁じられているのでそこで戦えないのでそこで戦わせることができる

主に授業にに使われ私用で使われることなど滅多に無いのだが

まいつか

零人は楽観的であった（バカ）

備考終了

む、なんかムカついた

なんだろうこの気持ち、

空は青く静かに動く

俺、詩人なろうかな・・・やっぱ、やめた似合わない

くだらない事考えるだけで怒りが収まるっていう便利な道具もってよかったー

てくてくてく

あれっ、そっぴや家に食材あつたっけ？

．．．．．ないな

スーパー寄つてくか

時は流れ

うーんと、今日はジャガイモにでもするか．．

まずは、じゃがいもは．．あつたあつたと

．．．これでいいか

品定め中だよ

後はカット（作者の料理知識が無いため）

こんなもんでええか・・・

さつてと、家に帰りますかな・・・

「あたっ!!」

「キャッ!!!!」

誰かに当たっちゃった!

卵は・・・セーフセーフセーフ

「ちょっと、謝りもなし」

相手は謝ることもせず卵を気にした俺にご立腹みたいだ
卵は貧乏学生の生命線だぞ!!!

「ええつと、悪い」

相手は尻餅をついてるので手を差し伸べる

「んもう・・・」

なんか俺呆れられてる!?

「悪い、ホントに・・・」

まあ、こっちの不注意でただ単に立った人にあつたわけだから
誠意を見せて

「別にいいわよそこまで言わなくて、たいした事無かつたし」

「そういつてもらえると助かるわ、じゃっ『ガシッ』なんですか・・・?
」

襟を捕まりました・・・

「せっかくだから、名前教えてよ」
訴えるの？

やだよ、訴えられんの

「・・・訴えんの？」

俺ってボキャブラリー無いな、自己嫌悪

「はあ？」

違う、それとも悟られまいと？

「いいから、教えてよ！」
腹くるるか・・・

「ええつと、俺は橘零人よよろしく」
どもったよ、最悪だ
訴えられちまう

「ふーん、よろしく、じゃね」

「ちよちよい、街？町？待ち！！」

「何！？」

なんだ笑顔かわいすぎるわ、藍色髪の君
いや、もともと見たとき「かわいっ」って思ったよ正直ね

そこで、なんで今まで言わなかったんだということだけど
人間訴えられるか、られないかでそんなことにかまってられません

「何!!!!!!!!!!」

おおっと、自分の世界に入っちゃたみたいだ

「名前教えてくれないのかなー、なんて・・・」

「あっそうだね、言ってなかったわ、あたしは深山^{みやま}茜^{あかね}、あたしの事は名前で呼んでね、なんか苗字だと親近感無いし」

「了解、じゃあ俺の事も」

「うん、今度こそじゃーねー」

「ああ、じゃー!!」

そう言っただけ俺の前から手を振って去ってった・・・

疲れた・・・

またも精神的に・・・倒置

「かーえろかえろ」

周りから白い目で見られた

そんな事を気にする、俺じゃないけどね!!!!

そして、帰宅

「なんだかなあ」

「何言ってるの？零くん」

「かわいい、零ちゃん」

なに言ってるんですか

「なんで、アンタらいんの」

今家に居るんだが俺の家になぜか美玖ネエと校長を辞めさせたと推測される人が居る、居間に

俺の家、まあまあ大きいからいいんだけどね（3LDK）

「久しぶりの家族の団欒じゃない！」

いや、そうだけどさ・・・あつ

「そついやあなたアメリカにいるんじゃないの？」

これが結構な疑問だった

「あつちの用事が終わったただだよ」

ふーん、意外と面白み無いな

別に面白さ求めてたわけじゃないけど

「まあ、そんな事は置いといて、さつきからなんでさつきから母さんって呼んでくれないの？」

さつきからが二個入ってますよー

いやあさ、久しぶりだよね

はつきり言えば恥ずかしいんだ

「あんね「ここで零くんに重大発表が！！！」おい・・・」

美玖ネエ、今日は被せるね・・・

重大発表ね、怪しすぎるぞ

「聞きたくない」

「そんなこと言わずにねえ、ねえ」
うざい・・・

「言うなら言え」

「えへへ、実は私、義姉弟であることを知ってしまいました」

「へっ・・・・・・・・・?」

隣を見ると「ごめんね」と言つかのごとく舌をチヨろつと出す母さん

「ちよい、母さん「やつと母さんって呼んでくれたー!!!!!」
そんなことじゃないのに

少しうちの事情は複雑だ
これはあくまで母さんから聞いた話だが

俺の本当の両親は事故で死んだらしい
そのとき俺は一歳だった
俺はその頃からまあ魔法に長けていて
天才児と呼ばれていた、そのせいで親戚からは恐れられ誰も俺を預
かるうとはしなかった

俺が一人で公園で泣いているときに母さんが通りかかってそのまま

家に連れて行った

その後、親戚の所に色々話した後俺を養子に向かい入れてくれた

それを母さんがアメリカに行く前つまり3年前だ

ちなみに親戚たちとなに話たのか聞いたところ、周りから黒いオーラを出した後

「ひ・み・つ」と言われたので（怖かったし）やめた

美玖ネエもそのとき3歳なので記憶はあらず

義理だと悲しむかと思っ、母さんには秘密にしてもらっていた

なのになぜ

「そつか・・・美玖ネエが嫌なら俺は橘家から外してもらって構わないから・・・」

これは前々から考えていた事だ、美玖ネエが嫌ならしょうがない俺はこの人達にとっても感謝しているし迷惑を掛けるようなら、ここには居たくない

「やだよ、そんなの」

少し涙目でいう美玖ネエの発言は俺にとって意外なものだった

「なんで・・・俺はこの家とは関係ない人間なんだぞ！」

「零ちゃんは関係なくなんか無いよ！！！！！」

俺の言葉に泣きながら怒る母さん

美玖ネエも泣いている

「俺ここに居ていいの・・・？」

「当たり前じゃん」

美玖ネエ・・・

俺はこの家でよかった・・・

「大丈夫か二人とも？」

あれから二十分が過ぎた

二人は号泣し俺にしがみついている所だ
これ結構まずいかも

「うん、そろそろ収まってきたから」

「良かった、美玖ネエ・・・母さんは？」

「私も！」

「じゃあ、離れてくれるかな？」

いっこうに離れないに二人に言う

「「イヤ！！！！！！」」

「いいから、離れる!!」

さっきは申し訳なさで大丈夫だったが今はマズイ

「ふん…零ちゃんは二人も女の子泣かしといて、そついつこと言うんだ」

「グツツ」

そう言われると弱い

「わかった、二人が納得するまでここにいてくれ」

妥協するしかないよ

俺は全力で本能という魔物に戦わないといけないんですね・・・

「「ヤッタ!!!!!!」」

笑みを向ける二人

まあ、こんなことで二人の笑顔を見れるならいいか

そんな俺が後悔するのはそれから五分後の話だ

（もう離れてくれーーーー）

第九話 バトルとツンデレと事情（後書き）

とりあえず、主人公の事がいまいちわからないとの事なので主人公の軽い紹介から

たちはなれいと
橘 零人

年 15

髪 黒

顔 かなりかつこいい（自分ではきもいと思っている）

理由は眼鏡（一話参照）が超似あっていなかったたのもてた事がなかったから

これは一部です

本格的なのはまた今度

ツンデレうまくできていません、結果普通の人に（汗）

あと初シリアスですね。

怒涛の急展開そこらへんに駄文さが・・・

主人公の過去です。

うまく書けてるといいんですが

とりあえず、第一章もしくはプロローグの終了です。

サブタイトルのやり方も少し変わります、お楽しみにしないで下さい。

後書きを長々とすみませんでした

また皆様とお会いできる日を・・・

第十話 10話めなのに進まんねの巻（前書き）

先に謝ります、すいませんでした

第十話 10話めなのに進まんねの巻

『どたどたどた・・・』

朝から騒がしいな

どうせ、根治だろうと予測

そのまま眠りにつこうか・・・

んっ？体が動かせない？なんで？

ああ・・・

あんた等が俺の俺の腕を押さえつけてるからね・・・んっ！？

「うわあああああ！！！！！！！！」

なななななああああんんんんっででででで

何でこの人たちが？

昨日帰したよね！

とりあえず落ち着け・・・ヒッヒフー、ヒッヒフー（なぜ、ラマーズ法？）

ヨシッ・・・

ゆわずともわかるね・・・ご存知のとうり、母さんと美玖ネエだ

この二人が何でよりもよってこの部屋に居るのは甚だ疑問だ

俺は色々事情があつて一人暮らしをしている
だから、あの二人には自分の家に帰ってもらつたはずだ・・・いや
絶対に

だつて見送りしたもん、結構積もる話もあつたから話し込んで疲れ
たしすぐ寝たけど・・・

この状況でも動けない、離れない・・・

二人ともスヤスヤと眠ってんね・・・襲っちゃうよ！
って危ないよ、危ないよ、少しトリップした

そして二人の顔を見る俺・・・かわいいな

和んでる場合かつ！！！！

これは根治に見られたらマズイ！

「どうしたっ！？・・・・・・・・・・ごゆっくりい・・・」

ドアを開けすぐ閉める根治くん
時すでに遅し・・・
やばい、やばいよ

「二人とも、とりあえず起きろ！」
あまりに気持ちよく眠っているので躊躇われたが、激しく揺すつて
起こす

「れーいーくーんーご飯はーまだー早いよー」

俺はそんなに食いしん坊じゃありません。

悠長に突っ込み入れてる場合じゃねー

愚姉はほっとけ

そしてなぜ起きない母さん！

それよりも

「根治！俺も何が何だか・・・っていねーー」

どうやらもう下に降りたみたいだ

最後まで話は聞くべきだよ・・・

「ねえー零くんーおーいーしーいー」

ああ、うるさい

もう面倒くさいので周りを気にせず強引に起きる

『ガバッ』

『ゴン』

「ひゃあー！！」

「ワッ！！」

どうやら母さんはベットから落ちたらしい

手ー自由になったし気にしねえーけど

さっさと起きないアンタが悪い（責任転換）

おうおう早く、早く誤解を・・・根治待ってろよっ

「痛い、何すんの」

「零くん、ちょっとびっくりしたじゃない」

抗議の声を上げる母プラス美玖ネエ

「あなた達なんでここにいいのかしら!!」
怒りぎみのオカマ口調

なんでこうゆう場面でふざけてしまうんだ・・・

「零ちゃん、おもしろーい」

こうなるだろ！

わかってんだって、やめりゃあいいのに…

そこら辺は笑いの神降臨なのかなー

何言ってんだ俺・・・

美玖ネエ苦笑いかい、俺って精神的に弱いよね…

「所で零くんはなんでそんなに慌ててたの？」

「そうだ、そうだー」

合いの手ウザイぞ、何歳だ!!

それと美玖ネエの当然の疑問ありがとう

俺、若干アルツハイマーかも

「根治、根治だよ、根治が六階をじゃなくて五階でもなくて誤解し

てるんだ…コレには俺のプライドと命がかかってるから何とかして下さい……」

土下座してますよ

もうすでにプライドはスタボロの気がするが……命には代えられないから、ええんよ

「零くんにそこまでされちゃあね」

手の平上にして顔の近くに寄せ「しょうがないな」の米国風ポーズ

「そうと決まれば早く行くぞ……!!……!!」

二人を連れて下へ

「おう、朝食つくつといたぞ、材料勝手に使わせてもらったけど」

何事もなかったかのごとく、椅子に導く根治

「根治……いい何も言うな、お前が近し」それ以上は言うんじやねえぞ」

そんなこと言わせるわけにはいかん
俺のモラルがそれを許さないし

「森野くん、あなた意外と料理うまいんだね…コレとか作り方教えてよ」

「ほんと、意外意外」

意外と何度も言われ、床にのノ字を書く根治

あなた方を何のために連れてきたか知ってるかなー
料理食わせるためじゃないよ

「何してんだよ…根治誤解なんだって、美玖ネエもホラ」

「そうなんだ、実は私たち本当の姉弟じゃないの!」

「えっ、そうなんですか、じゃあ近s「言うことが違うー」何!？」
根治もイライラしてきてるっぽい
いかんせん俺もただけど

「だ・か・ら多分ね、本当に聞いたわけじゃないから推測だけど二人の悪戯心みたいなのが働いたんじゃないかな!？」

「す、すまん!わかった何もなかったんだな信じるよ」
怯えてるよ、俺に

そんなイライラしてたかな
今後気を付けよう

「わかってくれたなら、いいけど」

「むー」

隣でぶすくれているのは無視の方向で

根治が時計を見る

「どうした時計なんか見て」

指差してなんなのさ、ほうほうもう時間が少ないと・・・

「ぬわにー」

「即行着替えるぞみんな・・・って何時の間に着替えてんだよ」
美玖ネエと母さんはもうとつくのとうに着替えてる

ちなみに根治はうちに来るぐらいなので最初から準備万端

「急いでねー零くん！ー」
うつつさい、悪の根源め

一分後

「おーい、美玖ネエーメガネしらない」
部屋からなのでのぼしぼう多し

「ああ、あれ壊しといたよー」

「ホワーーーーイ」
なぜ！ー！

「似合ってなかったし、度も入ってなかったし、昨日忘れてったし

いらなかなーと思って」

意味わかんないし

そこでそうなる理由を五時間に渡って教えて欲しいもんだ…時間無いけど

「もういい、あとで聞くからもう行こう」
急いで玄関に向かう

「早くしろ」

「待ってたよー、零くん」

「遅いぞ、零ちゃん」

皆玄関に集合

「悪い！」

外に出る、もちろんみんなで

あつ、忘れてた

「行ってまーす」

一人でもここは忘れず

「もう魔法使おうよ」
大賛成だ

「風よ我が神速の脚となれ」

魔法の詠唱これで普通の五倍は早い、コレでギリギリかな

二日目も朝から騒がしいな、まっこれはこれで面白いかな…

第十話 10話めなのに進まんねの巻（後書き）

まあ、不満の方が多いと思います
すいませんでした

しみじみした話しはここで終えます、未来を見ましょう

とりあえず、第一章も終わったんで番外編でもやろうかなと・・・
皆さんでリクエストして頂けると嬉しいです。

『昔の話』や『海へ行こう』などなど、お願いしまーす。

最後に皆さんまた見てくださいね
さようならー

第十一話 戦いの予兆

「あゝあ、疲れた」

遅刻との戦いを終えた、我ら

と言ってもただ魔法使って全力疾走しただけなんだけどね
簡単に言っていると教室に着いたって事

あとの二人は途中で別れた、三年と校長なんで・・・

「ぜえ、ぜえ・・・ありつえねえ・・・ハアハアなんで・・・ピン
ピン・・・してんだよ」

息を切らしているんだね、根治くん

「ピンピンしてねえよ、疲れたって言っただろ」

何を聞いているのかね、コイツは

「説得力・・・ねえよ」

「とにかく入ろうぜ」

廊下で会話してたわけだな、特に意味はないけど

『ガラガラ』と戸を開ける

「キャー」

「ワーーーー」

ななななんだー、何事だー

男子と女子が俺らを見て歓声もしくは絶叫している

「これって、どうゆうこと」

根治も困惑しとりやす

しょうがないさいつも、冷静沈着な俺でさえ戸惑ってるし・・・

「零人くーん」

あつ、我が天使、来実様が呼んでおられる
急がねば

なんで、天使なのかは6話参照ね！
つてなーに言ってたんだ、俺？

そして俺は自分の机まで『ワッシャ、ワッシャ』と歩く

「きゃーーーーー」

うっさいわ！！！！

「おはようー！」

『ニコッ』と微笑みかけてくる

「おはよう、これどうゆうこと？」

「えっ知らないの「それなら、私から！」
いきなり横から出てきた

「これはねー」「待て！君は誰だ？」えーー憶えてないの？」

「いや、存在はうるさかったんで知ってはいるが…名前を聞いていない」

前は遮られたからな、記憶にあるかい？

「そうだったけ…まあいいや、私は早瀬^{はやせ} 夕美香^{ゆみか}よろしく…！！！！」
手が差し出される、握手しろって事なんだろ

「俺は橘 零人よろし！！」

「く」を抜かす意味は無いけど…！！

もちろん、手も握るよ

そこに邪な考えは無いから

「うーーーーー」

なんか知らんが、握手しているのを見ながら唸っているにしても「うー」ってかわいいな！

「俺は森野 根治よろしく」

根治も挨拶するんだね…

「かわいいー」「うー」だよ「うー」来実かわいすぎー！！」
キヤピキヤピしてる

来実なんて抱きつかれちゃってるし

根治哀れ、紹介を無視されるという悲しい結末に

「嫉妬しちやったの！？んーーーー」

そんなの無視の早瀬、さらには抱きつきっぱなし
落ち込んでるよ…

「何言ってるの、もうやめてよ」

恥ずかしがってるじゃん

「座ってくださいー」

もう先生が来ていたらしい

ちなみに早瀬は不承不承と戻っていった

「友達なのか？」

仲良さげだったし

「うん！一年生のときから！親友！！！！」
ふーん

「それはさぞ疲れただろうな」

あいつの相手をしていたら寿命が十年縮みそうだ

「????」

よく理解できなかったみたいだ

「話を戻して、なんで騒いでたんだ？」

もう、先生来たし騒ぎは収まったけど

「でも、廊下にポスター張り出されてたよ」
ポスター？何？

「何の？」

「……決闘！！一年生が三年生に挑む！！みたいな事が書いてあったよ」

はっっ！？それってまさか

あのいかつい三年生か……んっ？

「何でそこまでの騒ぎに！！！」
立ち上がってしまった

「あのお、座って頂けると有難いんですけど」
注目を浴びてしまった

そりゃ、驚くだろ

そこまで、大事になっていれば逃げられないじゃん

「なに、くく、どうしたんだ」

笑ってんな、コノヤロウ

「グハッ！」

「どうしたんですか、森野くん」

先生に心配されてるよ、うらやましいねえー

「いえ、なんでもないです・・・」

「ちゃんと、聞いてくださいよ・・・私が新任だからでしょうか、グスッ、グスッ」

ちよっと、教室で泣くんじゃない！！

そうゆうのは今は心の中に閉まって、後で職員室で泣きましょう

「先生！！スイマセン！！真面目に聞きますから、泣かないで下さい・・・」

うおお、根治が困ってるなんて珍しいな！フィルムに納めておきたい

「ハイ、スイマセン・・・ヒックッヴん、はい、もう大丈夫ですから・・・」

その後は根治が場を盛り上げようとするも、暗い空気で終わった

「で、結局なんだったんだよ？」
「やっぱ、憶えてるよね」

「なーんでも無い」
「コイツに教えるとうるさそうだし」

「あの、暗い空気はお前が元凶なんだぞ！」
「確かにねえ、まっいつか」

「あの騒ぎの理由がわかっただけ」
「それって？」

根治視点

そうか、そうやって生徒会に引きずり込むわけだ実に巧妙だな

俺にあの人を誤解させてと
うゝむ

「逃げようと思ってたのになー、俺目立つの嫌いなのに」
零人なら、そう考えるから
生徒会で後押しさせて逃げられないようにすると
うゝこわっ!!

この、瞬間絶対に敵に回したくない相手は生徒会であることを知っ
た根治であった

零人視点

高校入った瞬間いろんなことあんな・・・

お昼時

「お前が橘零人ねえー」
人のことを舐め回すようにみるイカツイ三年生の仲間とおぼしき人々
どうしてこんなことになってしまったんでしょうか

「派手すぎだろっ！！！！」

あらためてこれ結構ビックリしてるわ、俺だけど

いや、気になるから見に来たわけだ

ポスターを

そしたら生徒達が一番通るところにラメが付いたり無駄にライ
トアップされてたりボンボン（わかる？）がいっぱい付いていたり
それはもうビックリ仰天の内容となっている

とまあ呆然していた

「ありえー、君がヤッサンに喧嘩を売った人かい？」

「ああ、コイツが・・・」

「ヤッサンこんなの相手すんのお」

いかにも不良という感じの人たちが俺の周りを囲む
ヤッサンって誰だよ

とここからが続き

「そうですね、何か？」

俺はこうゆう群れて絡んでくるタイプは苦手

「うつわー生意気ー、もうやっちまわねえ」

ひよろひよろの野郎が細い目をさらに細くして俺を睨む
とりあえず眠らせれば大丈夫か・・・

「何しているんですか」

俺がやるうと思ったとき、俺の後ろから声がかかった
なんとも抑揚の無い声だ

「やつべえ、橘 零人、お前はヤッサンにやられるから心配すんな
よおおおお」

逃げながら叫ぶ不良たち
ヤッサンって誰なんだろ

「なに考えてるのかしら」

「ウオツ！」

顔覗きこまりましたよ

「ふーん、そうゆう反応するんだ…結構ショック…」
顔を下げて落ち込む彼女

「す、すいませんでした、じゃなくてええーっと…」
どどどうしよう、えーっとえーっと

「ふふふふ・・・」

あたふたしてた俺がアホみたいじゃん

「騙しましたね」

「ごめんなさい、少し面白かったから」

改めて見るとこの人は三年生らしい

実はうちの学校リボンの色が学年ごとに違うんですね

三年は黄・二年は緑・一年は赤となっている

今までわかってたのはそのリボンを見てたからなんですね

風貌ではとても当てられませんよ

とまあ説明的になってしまったが理解できてないと駄目だと思ったし

「おきてますかー」

目の前で手振られている、零人です。

今見てみたけど

髪もロングの銀色で

顔もかわいいと言うよりも綺麗という感じで

「さつきはありがとうございました」

心底不思議な顔をしていたので話を違った方向に持っていく

「いえいえ、上級生に絡まれている下級生を助けるのは副会長として当然の行為ですから」

副会長だったのか…一応言っといたほうがいいのかな？

「いつも姉がお世話になってます」

「礼儀正しいんですね」

「変ですか？」

初対面の人に気持ち悪いと思われたか？

「いえ、噂と違ったので、そうゆう風なものもかっこいいですし」
やはり副会長というところでお世辞もうまいな

「私は工藤 愛理です、今後ともよろしく」

「こちらこそよろしくお願いします」
名前は聞いていると思うので言わない

「じゃあ、俺はご飯食べてないしそろそろ行きます」

「じゃあ、また」
一礼して去る

「多分、もう一度すぐ会う事になるんですけどね」
という囁きは虚空に消えていった

愛理視点

「零くんどうだった？」

どうだったと聞いているけど何だか誇らしげな美玖

「面白い子だったよ」

少し美玖の態度が嫌だったが素直に答える

「ふーん、かつこ良かったしょ」

「そうね、あなたに合うくらいには」

「そっかそっか、計画も順調だし言う事無いね！」

彼とならこの生徒会も面白く動きそつだ・・・

第十一話 戦いの予兆（後書き）

なんか俺の小説無駄に長いなーと思います
展開がいまいち変わらない

まあそこもアピールポイントにします。

後、短編書きました暇な人は見に行っていたけるとありがたいです。

感想もできれば書いて頂けると嬉しいです。

では最後にまた出会う事ができれば。

第十二話 飛ぶ矢に怒り

なんか、不思議な人だったな…

「魔法には攻撃タイプの人と守るタイプの人と回復するタイプの人と万能タイプの人がいる。万能タイプは全てにおいて平凡だ、極稀に万能タイプの中でも全部長けている者も居るが…そういう奴は珍しいとでも思ってたってくれ」

今は授業中なのだが、こんなことを考えている暇だから

だってやりたくねーもん、あーメンドイメンドイ

何を考えてたかと言うと、さっきの副会長さんだ。

いや、ふざけたり、急に大人になったり

うーん、キャラが掴みにくい人だとも思っておこう。

「どあつつつつ…!!!」

机に突っ伏している俺に矢が飛んできた、間一髪で避けた

なんだなんだ？敵襲か？

最初は先生かと思ったが、先生は俺の「どあつつつつ」と言った言葉さえ聞いていないようだった…

「なにそれ!?」

隣の方は驚き8割、疑問2割と言った顔で俺を見ている。神田来実さんですけど…

一つの矢に巻きつけられた紙…ってこれ矢文じゃん！！今何時代だよ！！！！

とりあえず来実には「さあ？」と返し、気になる中身を拝見する

橘 零人殿

今日ワシの家に来たるらし

みじかつつっ！！！！

何でこの言葉一つに己の命掛けなあかんねん！！
これは俺のツッコミも炸裂するわ

・・・ん？これ考えてみたらあの人しかいないじゃん
この矢は・・・特訓じゃーってことか？まあいい

アノ人が呼ぶって事は

そうか・・・この日なんだもんな

「どうしたの…？」

「んや、なんでもない」

明後日の方向を見ていた俺が不思議だっただけらしい。
なんでもないという曖昧な表現でこの会話を終わらせる
そしてまた机に突っ伏す

俺のせいで人が死んだ日・・・悔やんでも悔やみきれない過去……

「オイ、起きろ」

「なあーにー？」

「なに寝ぼけてんだ、もう下校時間だぞ」

根治が俺のことを揺すって起こしてくれたらしい
考え事をしていたら、寝てたらしい……らしくないって事なのかもしれない

「おお、わりいね」

それにしても、もう帰る時間か・・・早いなでも、来実が起こしてくれると思ったがそれでどうの来実は悦の表情を浮かべながら「かわいい・・・かわいい・・・」などとうわごとを喋っている。

大丈夫か・・・？

それはそうと言っておかないといけない事が「根治い、俺用事あるから、さき帰ってて」ちよつと目線を下げる根治

「ああ、わかった」

なんで理解したのか不思議に思ったが、手に持ってる矢だけで全てを理解したらしい苦笑しながら頑張れよなどと言ってくれた。

お前は気が楽でいいな・・・

さーて帰るかなんて思ったが、誰かが出入り口の前で立っている。

副会長だ・・・何の御用だろう？

まあ、どうでもいいか

『すたすたすた』

『がしっ』

「どこ行くんですか？」

何事も無かったかのように横を素通りしようとしたところ腕を掴まれた。

俺なのか・・・

副会長のことをギギギというような、ぎこちない動きで見る俺
誰でもそうなるよ、だって若干怒ってるもん

「いや、帰宅しようと思った所存でありますが…何か？」

「今日は魔法対決を予定されてるはずですが？」

あつそんなこともあつたな！

すっかり忘れてた

でもなんでこの人が止めるんだ？

「生徒会の全面協力です。」

俺の疑問を感じ取ったのか理由を教えてくれる。

怖いな、工藤さん…

ああ、だからあの派手なポスターも許されたのかもしくは生徒会が
用意したのか？どうでもいいか

しかし面倒だな、いちいち負けるためにガンバンのも…

いい事思いついた！

「俺、不戦敗で！」

妙に明るく

そして副会長の横を通り『ガシッ』過ぎることはできず。

「そんなこと許されると思ってるんですか？」

そしてデジャヴ、ギギギね！

でも一つ変更点が工藤さん次はマジで怒ってます。

「思ってないです…行きましよう！」

あの大きいバトルフィールドに満杯人がいる、300はいるわこりや
どうぞと連れられるはフィールド場
このフィールドは色々な状態でできるように、荒地や森や海など多
彩に設定されている。

こつゆう風に戦う分には平野なので、今は平野に設定されている

「おう、恐れずに来たか」

フフフ・・・と不適に笑うヤッサンと思われる先輩
何なんだ、あんた俺に肉弾戦で負けてるのにすげえな！
見習いたくねえ。

「もう始めませんか？」

なんかもうヤダ…

それでも鳴り止まない歓声に、もうただただ驚くばかりの俺はもう
すでに疲労困憊

「オーイ、零人ガンバーー」

根治うるさい・・・って根治！？

いたのか何とかしてくれ

目で合図を送るがまったく気づかない

「あれがお前の友達か…アホそうな顔してんな」

はっ！？てんめえ

ふー、ふー、落ち着け乗せられんな、俺

「零人くーん、がんばってー」
お次は来実か…嬉しいね、泣かせるね

「あれ、お前の彼女？かわいいけどアホなんだろう？お前と一緒に
ブッチーーン

根治視点

あつ、キレた

あいつ友達のことと言われると駄目なんだよ。

止めたほうがいいよな

あいつらの命のためにも…

でもここで止めたら、俺が殺されるんだろうーな

ぶるっ

うっ、身震いしちゃったよ

決着付いたらすぐ止めよう。

零人視点

「オイ、てめえ覚悟できてんな」

「ヒッ！ー！」

俺の睨み一つで少し悲鳴をあげたが、今はそんなことどうでもいい

「炎よ、火の壁となり敵を滅せ…」

3メートルはあるつかというぐらいの火の壁が敵を囲う、そしてそいつに当たるギリギリで止める。

「降参するか？それとも炭になるか？」

自分でも驚く位の低い声、それだけ俺は怒ってる

「降参します、降参します、殺さないでえー」

もう涙声だし、そろそろやめるか・・・

『パチッ』と指を弾くと火の壁が消える

「もう俺の前に現れんな！！」

首が取れるんじゃないかと思われるくらいに首を振る奴

気づけば、先ほどまで騒がしかったここも静寂に包まれてるやべえ、やりすぎたか？

『ウワァーーーーー』

そうでもなかったか…

また騒がしくなるかも、俺のまわり…

第十二話 飛ぶ矢に怒り（後書き）

申し訳ありませんでした。

もうひたすら平謝りで

もう一つの連載とちよつとしたゴタゴタが発生しまして…

それに気が付けば22000アクセス突破

本当に…ほんとーうにありがとうございます。

こんな情けな作者ですが、これからもよろしく願います。

自分でも思います・・・なさけない・・・

第十三話 新たな黒い影（前書き）

遅れました、すみません…

更に短い

でも一言

シリアスカケネーーーーー

第十三話 新たな黒い影

もうすっかり好奇の視線を受けてしまってる、俺
あーもーもー、うるさいうるさい！！！！

その騒ぎの中心の言葉は「ワー」や「すごい！」や「誰だあいつ」
などだが、稀に「かつこいい」などもある、これがよくわからん
…かつこいいってなんだ？この300人ぐらいいる中に美形でも見
つけたのか？ならここで言うなよ凹むわっ！！

つとと、へこむのは後にしてさっさと去るか…

「はーああ、目立ちたくなかったのにな……」
今は目的地に向けて徒歩中

でも、途中が色々大変だった…副数名に追いかけられたり、サイン
をねだられたり…もうなんなんだ、この学校は！！

と考えている所だったが、道の真ん中に白い光がみえる

これは空間転移か…結構な実力者だな
そこから出てきたのは金髪の美少年
気に食わない、俺の嫌いな奴

奴はある、裏社会のチームに属している人間、最近は会っていないが…

こいつらの情報は少なく、政府さえも尻尾を掴めないで捕まえられないでいるというほど実力者揃いだ

今は影でこっそりと力を溜めていると聞いていたが…

「どうも、久しぶりですね…」

軽い微笑を浮かべて俺を見る見知った顔だ

「なんのようだ…？」

コイツに用は無いし、見ていたくない

「フツ」っと笑う奴

「露骨に嫌そうな顔しないでください…僕はただあなたを勧誘してきましただけだ…」

「無駄だ、何度来てもらっても答えはいっしょだ。」

俺の実力を知ってか、俺を仲間に取り入れようとする

「なぜですか、なぜあなたには理解できない？」

「俺の理解は関係ない、橘家がお前に付かないのならばお前の仲間となることは無い」

「じゃあ、あなたに問う！なぜ我々の気持ちを橘は理解できない？」

俺に聞くことじゃあないな、返答を求めてはいないらしいが…

「今、我々は世界を作り直そうとしている、この腐りきった世界を…神を超えるんだ」

「フフフ…面白いこと言っただな…」

「なにが、オカシイッツ！…！！」

俺の態度がどうも気に食わなかったらしい

「人間が神を超えることなんて無い、人間は無からは何も作り出せない」

「無から何かを作り出すのは神だと、そう言いたいんですか？」

その一言に頷き肯定の態度を取る

「あなたが偽善者なのかどうか知らないが…」

「あなたは人を殺してるじゃないですか・・・」

なんでそのことをっ！！

俺はその場に呆然としてしまう

「これ以上零人を侮辱するならば私があなたを殺します！」

「美玖ネエ・・・」

人通らない道に美玖ネエが一人、俺の後ろから来た

「そうですか…それなら僕はここで消えますよ…零人さん、あなたを諦めたわけじゃない…」

奴は空間を移動し逃げていった

「美玖ネエ、助かったよ…」

当の美玖ネエは無言で俺のところに歩いてくる

『ギョッ』

どうやら俺は抱きしめられたらしい

「零くん、つらい時は一緒にいてあげるからね…」
涙声の美玖ネエ

「ありがとう…美玖ネエ…」

「ありがとう、美玖ネエだいが落ち着いた。」
離れてくれない、さらに無言だ

「美玖ネエ？」

「離さない！！！」

どうやら離す気は無いらしい、っていうかさっきのシリアスな展開を返して欲しい

「オイッ、離れろって！」

よくも義理の弟にそんなにできるな
一つ言いたい、あんたスタイル良すぎ！！

「んゝ、零くんのいけずゝ！」
あんた本当何言ってんだ

「まあいいや、俺やる所あるから早めに行くよ」
「わかってる、がんばってきてね！」
ハイハイ、応援ありがとね

「じゃあねゝ」

美玖ネエの言葉を背に走って目的地に向かう

「ふう、着いたつと」

『シューーン』

「ナツ、アツブネエ!!」

着いた瞬間矢が飛んできて何とか間一髪で避ける

「ガッツ!!」

安心した瞬間に投げ飛ばされる

そして木にぶつかる俺

薄れていく意識の中で思うことは一つ

ざけんなよ、じじい…

第十三話 新たな黒い影（後書き）

申し訳ないです。

謝ること多いな…

年末に近づいてどうもゴタゴタしています。

ただの言い訳ですが…

待ってる人いないですよね？

ならいいんです。もうジャンジャン遅くします。

嘘です、本当に早く更新したい。

切に願う城崎海でした。

第十四話 暗い過去

「んゝ、どこだここ？」

眠い目を擦りながら起きる

どうやらここは、どこかの部屋らしい…和室らしい…って思い出した！！！！

「おゝ、起きたか…」

やりやがりましたよ、コイツ…

「じいちゃん…何のつもりだ？」

俺を木に向かつて投げた張本人

たちはなりゅうげん

橘 竜弦

橘 玲香の父、ということは俺と美玖ネエの祖父である。

あらゆる武術に精通していて俺が色々な武術を教わったのも、この人である

なかでも、山籠り一ヶ月サバイバル生活は超きつかった

この爺との24時間耐久格闘は中でもやばかった、一日に十度死にかけるといふ、普通の人ではとても体験できない出来事をした。

「いやあ、お前の実力がまだまだだということがわかった！」

爺ちゃんと比べんなー！！

この人は熊二頭を素手で戦って勝つという、最強さを発揮していた
ありえない、実にありえない

でも、そうは言わない

もし言ったら「零人の修行が足りんのじゃー！！！！」とか言う
て、また修行に駆出される

それだけは死んでも阻止しなければ… まあこう言っつてことは死ぬより辛いんですよ…

「わかった… とりあえず、行かない？」

「そうだな… まあ、あいつもそろそろお前に会いたがつてるしな」

「そうかな…？」

どうしても自重気味に笑ってしまう、辛いとか俺が言うべきじゃないのはわかっているのに…

「お前は悪くない、それに息子のような零人に会いたくないわけ無いだろ」

俺の暗い気配を察知したのか、爺ちゃんが優しく言ってくれる

こういうときに俺は家族の暖かみを感じる

現金な奴だと言われるかもしれないが、この人たちがいなければ今の俺はいないとも言いきれる

俺にはもったいないぐらい、いい人たちだ

「ありがとう」と面と向かつては恥ずかしくて言えないのだが

「よし、行くぞ零人」

「うん！」

「お婆ちゃん、元気だった？俺高校生になったよ、友達もできた、美玖ネエも母さんも相変わらず元気すぎるほど元気だよ……お婆ちゃんは元気にしてる？風邪引いてない、って引くわけ無いか……お婆ちゃん、本当にごめんね、俺のこと許してくれないかもしれないけど、俺はお婆ちゃんの分まで絶対に生きるからね……また来るから」
墓石に話しかけている、勿論返答は無い
ここにはお婆ちゃんの骨が入っている

お婆ちゃんを殺したのは俺だ……

昔、まだ俺が小学一年生だった頃……

まだ、その時にはお婆ちゃんは生きていて

その頃もお婆ちゃんは綺麗で、なんと言うか周りに気品あふれるオーラを纏っていて

結婚した後も言い寄ってくる男は絶えなかった

俺にとってお婆ちゃんは母よりも母という感じだった

俺はお婆ちゃんにとっても懐いていて、よく母さんが嫉妬していた

そして俺がお婆ちゃんの家に遊びに行った時に事件が起こった

その時、俺とお婆ちゃんは二人でいた

爺ちゃんは仕事だったし、母さんも仕事で、美玖ネエは学校に少し用事があったから居なかった

「おばあちゃんーん！！」

俺とお婆ちゃんが森に居て、俺は走り回ってる、今考えると走り回るのが好きだったんだな

「ハイハイ」

お婆ちゃんは笑ってついてきてくれていた

別に何の問題も無かった
唐突に事が起こった

「うわっ、うわああああ」

俺は昔から魔力が強くて、とても幼い時の俺じゃ抑えられなかったらしい

魔力が暴発した

俺の回りからいきなり炎が出て、森を燃やした

「魔力が暴発したんだわ…」

「助けて、お婆ちゃん…」

何が起こったのか、わからない俺は泣きながら助けを求める
このまま、魔力を消費し続けると俺は死んでいたらしい

残る手段一つだった…

お婆ちゃんが俺に魔力を与える、それだけ

そして魔力を与え続けお婆ちゃんは俺を助けた

己の命と引き換えに・・・

「おう、挨拶終わらせてきたか？」

「うん、バツチリだ！」

顔を見られたくは無いので爺ちゃんには遠くで待ってもらっていた
爺ちゃんは人差し指で俺の頬の涙をとる

爺ちゃんは気づいたちゃったらしい、恥ずかしいな

「よし、帰るか？」

「ああ、もう行こう」

お婆ちゃん、必ず俺は幸せになるよ…

第十四話 暗い過去（後書き）

今回は早めですよね？

まあ、とりあえず良くできたと自分を褒めたい
がんばったな…2000文字いつてないけど
短くてすいません

とりあえずシリアスはしばらく無いと思います。
コメディー、一直線で！

シリアス相変わらず下手だな
読みやすいように書きたい・・・

あと気づいて頂けてるでしょうか？

実はお嬢様出てません、タイミングが無かったです。
お嬢様出てから人物紹介します。

最後に読んでいただきありがとうございました。
それと見捨てないでまた見てください。
では、また会える日を

第十五話 結局あなたはメイド！？

「つるせ〜」

今、爺ちゃんの家に戻って来たわけだが

「オイッ、面白い事言え！！エッ、フトンが吹っ飛んだ？がっははははは・・・」

ちなみに俺は何も言っていない、もはや無視だ
酒を飲んでいる爺ちゃんの隣できつと迷惑そうな顔してるんじゃないかなーと思われる俺

爺ちゃんは酒を飲んだら性格が変わるらしい。

厄介なのは絡み酒プラス笑い酒な所だ

みんな体験してみる？うざい、うざいよ
二回言っちゃうね、ついつい

『ピリリリリリ・・・』

あっ、俺の携帯鳴った

実は携帯持ってたよ、着うたみたいなのはしてないけど・・・いや、最近の歌しらねーんでいす。

「もっしー、誰？」

もっしーは結構ノリで

「オレオレ」

なにっ！まさかのオレオレ詐欺！！

これは説教しなきゃ！

「オイッ、お前のような奴がいるからこの世から犯罪が「誰と話してんだ零人？」んだ！！」

ちようど消え去りましたよ・・・

爺ちゃん…あなたは空気が読めていない…

この話をすれば今の女子高生は「KY」って言うぞ

「おーい、もしもし零人？」

「何で俺の名前を！？さてはエスパーか！？」

「お前はなーに言ってるんだ？」

「黙れ！！オレオレ詐欺犯！！お前のような奴を最低と言うんだ！！」

「俺はオレオレ詐欺犯じゃねー、お前画面見てないのかよ！」
見たけど何となく言ってみた、オレオレ詐欺に対する俺の気持ちって事で

とは言わない、だって怒るし

「何のよう？ここに掛けて来るなんて」

だから話を変える、これおススメ

「って話変わってるし・・・まあいいや、明日は用事あるし明後日どうか遊びに行かない？水戸も会いたがってたし」

「マジ？水戸くんも！！行く行く！！ゴメン、めんどくさいの近くにいるし後出掛け直すわ」

「了解、いい夜を」

「そうゆう一言がなかなか嬉『プープー』切るなよ！！」

まあ、いいけどさ…そうゆうのって友情の崩壊を招くよね…

じじいはなんか俺に絡み付いてるし…そうゆうのは魅力的な女性でお願い…

「ぐーぐー」

寝てるし…気持ちよさそうにしゃがって…
書置きして帰るか…

よし、いいなこれで
帰るとするか…

見事家路に着いたわけだが…

「貴女は誰ですか…?」

「はい、私は竜玄様に言われて来た、三島^{みしま}舞^{まい}と申します。」

「はあ…?」

引きつった笑いを浮かべてしまう。

前にいる人はニコニコで…

なんだか今日は疲れる日ですねえ…

旅行に出掛けたいです…助けてください。

「結局貴女は何者なんですか?」

「はいっ!! 零人様の御世話係のメイドです!!」
どうりでその格好なわけだ…スタイルいいですね。

なに、あのくそ爺何考えてんだ

「ハイッ！！なんですか！？」

やけに元気ですね。

「なんでなんですかね？あなたがここにいるのわ…とりあえず寝た
い」

答えは求めてないよ、自分ちヨ一眠いの、話は後にしたい。

「ハイッ！ー！そうですか、ならばまだお早めですが、ご就寝下さい」

「そうですね、すみません」

やっぱ、話聞かないといけないんだろ？がどうも眠い

「あの寝る、場所はどこにすれば……？」

やはり悪いと思っているのだろうか、どうも遠慮気味に聞いてくる。

「どこでも、どうぞ自由に寝てください」

ていうか俺、
 気きかないな…眠いんだからしかたないだろ

「はいっ、わかりました」

彼女の最高の笑みだ

俺も顔赤くなっちゃうよ

メイドさんだよな・・・なんでなんだろう

じじい何考えてやがんだ？
いや明日からどうし・・・クークー

舞視点

ご主人様、寝ちゃったな...どうしよう
なんか、メイド服着てるのにやけにさっぱりしてるし。
もうちょっと驚くかと思ってた。

寝る場所どこでもいいんだよね？
隣で寝ちゃおう！
明日からご主人様のためにがんばろう。

なんか後々事件になるよね...コレ...

第十六話 ハッキリしない存在

「いやー、昨日は疲れたな」
大きく伸びをする

爺さん、うるさいんだよ。

わかるかな？この気持ち、いやわからないだろーな！！

「おはようございます。患者さん！！」

はて、ここって病院でしたかね？

いやはや、自分の部屋が病院だなんて、今まで住んで一度も気づかなかつたよ…

・
・
看護婦さん…いや今は看護師さんか…看護師さんが目の前にいるし・

「ってんなわけあるかーーーー！！！！」

「へっ？」

「へっ、じゃねーよ、俺がおかしいの？いやいや俺じゃないよ、なんでそんな『普通ですよ』みたいな顔してんの、ここどう考えても俺の家！俺の部屋！えっ違う？いやいやいやこんな独特の世界観を築ける部屋は俺の部屋以外ない！！！！！！」

「へっ、でも普通だと思いますけど…」

キョトンとした顔で俺を見つめる、看護師？さん、ちくしょう、思いつきり正論じゃねーか

「ええそうですよ、普通ですよ！俺の部屋は普通ですよ！すいませんね、普通で！！」

「あの～、あの～、あの～…」

戸惑いまくりじゃん、訂正訂正

「ごめん…朝だと、基本変なテンションでさ…取り敢えず落ち着いたし詳しい話は下で聞きます…」

「はい、了解いたしました。」

まあ、普通に下に来たわけだけでも…

「一つ疑問構わないですか？」

あきらかにおかしい点がいくつもゴロゴロ転がってますよね

うん、俺はボケ役だぞ心配すんな

「ハイ、なんなりとお申し付けください」

了承も受けたところで早速

「あなた誰？」

これボケとかじゃなく真面目にね

実は昨日お酒をホンのちょこつと飲まさせて貰いまして…記憶がナツシングフォーエバーなんすよ

ちなみにフォーエバーには意味は無いと追記

「じゅ…しゅじん…さま……」

オイオイオイオ

えっ、チョイ待て

なぜこの人はいきなり泣きそうなんだ、おかしいって絶対

しかも御主人様あ！？

ついに俺もツツコミへと成り下がってしまったか……

ってそんな事言ってる場合じゃねえよ

しかも、ツツコミって成り下がってんですか？

自分で聞いちゃう？そこ自分で聞いちゃう？

……なんか色々とおみ……いや、お聞き苦しい点を見せて申し訳ありませんでした……

「ちょっと、待って下さい！！泣かないで下さい！！今はあなたの存在を明確にするのが最善です！！」

「私の自己紹介は昨日しましたー！！！！！！！！」

と言って今まで堪えていたのを吐き出すかの如く泣き始める彼女

オーマイガット！！

なんなんだ……

今の俺世の中の不幸を一身に背負ってる気がします
言いすぎですか？

取り敢えず、落ち着いて貰うしかないか…

「落ち着きましたか？」

そう言い熱いコーヒー…まあ、ホットコーヒーを正体不明の看護婦さんに渡す

「ハイ…グスツ…先ほどよりは十分…」

それ俺の事軽く責めてません？

いや、まあいいんですけどなんか視線が痛いというか…誰も居ない
結局俺の妄想だけ……

「なら、良かったです…じゃああなたは誰ですか？」

すると正体不明の看護婦さんは目にしょっぱい水の雫を溜める

あゝ、俺のバカ！！

変化球で聞けよ！！

「あの…スイマ…大丈夫です」

そんな泣きそうな顔で言われても説得力皆無です。

「昨日も言いましたが私の名前は、御主人様…いえ、零人様専属メイドの三島 舞です。」

色々と言いたい事はあるがゆっくりと聞いていこう

「じゃあ、何故看護婦の格好を？」

メイドだったらメイド服じゃない？普通

メイドで看護婦ってあらゆる点でおかしいでしょ！

「そっそれは、男の人はこういうのが喜ぶと聞いたもので…」

段々と声を小さくしていつて最後は聞こえないくらい小さくなった
恥ずかしいならしなきゃいいじゃん

しかも俺は看護婦って特別好きなわけじゃない

第十六話 ハッキリしない存在（後書き）

遅れたこと誠に申し訳ありません

今後頑張っていきたいのでよろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8072c/>

マジックアバウト！

2010年10月14日19時41分発行